

# 1年半の取材を 中間総括する

ルポライター 滝川 康治



トンネル建設が中止になった土幌高原道路。農村観光や環境学習を柱にした中止後の代替策の議論が始まっている。

「代案」の検討でより良い道探る  
これからは、不要不急の投資を避けるためにも、公共事業の代案を検討することが不可欠になつてゐる。代案の本格討議まで長い歳月を費やした千歳川放水路の轍を踏んではなかつと早く放水路に頼らない治水対策を見つけることができたのではないのか。今後、合流点対策や遊水地設置などを議論するうえでの教訓なども語られるべきである。

## 「提案の検討で良い道探る」

これからは、不要不急の投資を避けるためにも、公共事業の代案を検討することが不可欠になつてゐる。

連載を始めて1年半ほどになる。その間、長年論争が続いてきた、土幌高原道路と千歳川放水路の二大公共事業の中止が決まり、時代は大きく変わった。従来型事業の代替策を具体化させる動きもある。公共事業の予算獲得装置だった道開発庁は、今年で姿を消す。そんな転換期の公共投資を中間総括してみた。

# 放水路が中止へ

不要不急の事業を見直し  
インフラ整備の原点に戻れ

の六九年に道道へ移管されてから三十

年近い歳月を経て、「トンネル道路も駄目」との結論になつた。大雪山国立公園の環境保全を求める世論が、事業主本連載と「環境リポート」を合わせて計七回、わたしは上幌高原道路問題を取り上げた。「開発か自然保護か」の

構図にとらわれず、地域づくりのあり

方や将来の方向を模索する素材を提供できなかいか、と考えつつ書いたつもりである。



千歳川流域の治水対策をめぐる拡大会議（札幌市内で）。  
釐々双方が一堂に会して議論した意義は大きい。

倉ダムの事例が興味深い。

洪水調節と水道用水の確保を目的にした松倉ダム計画は九〇年代前半、市

川の合流点対策や遊水地の設置などの議論が始まっている。壮大かつ無謀なこの計画に終止符を打つまでに長い年月を要したのは、道開発局の対応によるところが大きい。放水路にこだわるあまり、建設省が提唱する総合治水対策を積極的にとり入らうとした。流域自治体も開

局、そつした頃さが漁業者や自然保護団体などの反発を招き、泥沼化した。曲折の末、堀知事の私的諮問機関にすべてが委ねられ、賛否双方が議論をぶつけ合ったなかで、「まず、流域内で治水の手当てを」との合意形成が生まれた。「放水路の十七年」のなかで、これが最大の収穫であった。

倉ダムの事例が興味深い。

洪水調節と水道用水の確保を目的にした松倉ダム計画は九〇年代前半、市民の前に姿を現した。計画に疑問を投げかける市民運動が起き、これらを受けて道は「時のアセス」の対象にする。そして九八年秋、事業は中止された。

特筆されるのは、行政が再評価の過程で、説明会や意見交換会など代案を議論できる場を創ったことだ。限られた機会だったが、市民がダム計画と代

一九九年七月、道開発庁は十七年間にわたって迷走してきた千歳川放水路計画の中止を表明した。十一月には、今後の総合治水を話し合った新たな検討会議も発足し、あらためて千歳川と石狩川

る流れになつてゐる。道も支援態勢を整えつつある。こうした構想が地域に根づいたものになるかまだ課題が多いが、「国立公園らしい利用のあり方」に向けた合意形成の土壤ができたことは確かだらう。

止から一年後、函館土現と市との二人三脚で河川改修や浸透性舗装など洪水の流出抑制に取りくむ総合治水対策を採用する方針を固め、市民や学識者らによる検討会を設置した。市民の頭越しのダム計画から地域の意見を反映した治水対策へ大きく転換したわけだ。のちの連載で「松倉ダムその後」をリポートしてみたい。



